

南方（ニューギニア）

東部ニューギニア

後方部隊の労苦

茨城県 浦沢 良平

【東部ニューギニア戦線で戦陣をきつた我が第五十一師団は、戦力回復不可能なほどの深手を受けた上、サラワケット、フェニシユテル山系を踏破して、その疲弊は甚だしい】

上陸地点はハンサ湾である。しかし波止場一つあるわけがなく、兵隊が作った小さな栈橋があるだけだった。五十〜六十人しか乗れない大発によって本船から

運ばれ、上陸する六百の兵員と数千トンの糧秣兵器等を陸揚げするのに丸一晚を費やして、大半の陸揚げをした夜の明け始めたころ、突如ノースアメリカンの攻撃を受けた。ハンサの基地にある十余門の高射砲が火を吹いた。高射機関銃の気違いじみた連射が不気味さを加える。

キーンという金属音を響かせたノースアメリカンは超低空飛行で、椰子の葉をかすめるようにダダダと、機関銃の弾痕は陸揚げしたばかりの糧秣に、また我々の身边に撃ち込まれ、糧秣を吹き飛ばし、大地に大穴をあけて将兵を殺傷。これが演習だったら、小銃、軽機の応戦が加わるが、まさに戦争だ。実戦の酣はなはだ。初めて知る実戦の洗礼である。

タコ壺に身をひそめ敵機の蹂躪に身を委ねる以外術

もない。下手に身動きすれば蜂の巣状になること請け合いだ。「山田軍曹、第二分隊はどうした」「木村伍長、軽機分隊は無事か」。小隊の安否が気にかかり、敵機に対する恐怖感は一隊に対する責任感が救つてくれる。「小隊長殿、田村上等兵がやられました」。田村のところへ駆け付けて彼の負傷を見た。幸い大したことも無いようだった。小破片による大腿部の擦過傷だった。「分隊長に通信、各分隊の状況を報告せよ」。幸い他の兵に負傷はなく小隊は安泰で、まずは胸を撫で下ろした。三十―四十分も経ったであろうか、敵の銃撃音も消えたが、部隊では三人の戦死、七、八人の負傷者が出た（特に八月八日）。

一瞬の戦火は去り平静に戻った。宿泊地といっても宿舎一つあるわけでなし、宿舎は自らの手で建てるのがニューギニア部隊の原則という。なるほど他部隊の宿舎も四本柱に椰子の葉を覆った漫画に見る南洋住民の家そっくりで、この程度の宿舎なら半日あれば建つであろう。取りあえず各小隊の宿営の地割りを定め、まず天幕を張り、四本柱に椰子の葉の屋根、いとも風

雅な宿舎が出来上がった。小隊の中には大工もいれば屋根屋もいて、好みによってはベランダを作り手すりも作る。自分で作った我が家がすっかり気に入ってしまった。枯れ草を集めて敷布団、日よけ虫除け用のスダレも作ったが、私達を悩まし苦しめた蚊の防除対策が何とも出来ず、終日吊りっぱなしの蚊帳（南方部隊用の九〇センチ×一八〇センチ程度の携帯用）の中、幾百幾千とも知れない蚊の大群。そのうち七割以上がマラリア媒介のアノフェレス蚊などが、昼夜をとわずブンブンブンと来襲した。

身体の周りにまとわりついて離れず、手といわず顔といわずたちまちにして真っ黒になるほどの蚊の大群、両手は絶えず団扇を使って彼等との戦い。全く蚊の多さに驚き、また処置無しを嘆くのみだ。一度蚊帳を出入りすればどうしても身体についた蚊が、四十―五十匹は中に入ってしまった、これを叩き殺すのに一苦労する。この蚊群の中に生活をすればマラリアの伝染は驚くべき速度で蔓延する。マラリアなど知らなかった我々新鋭部隊も、十日と過ぎるとほとんど四十

度の発熱。しかもこれが二三日続く。体力、薬物があるうちはマラリアも二三日で治まったが、月日の経つに従いこのマラリアが皇軍將兵の命取りとなった。

やがて軍命令が下達された。「第五十一師団の消息は全く不明。補充部隊は現在地において待機、宿営指揮官の指揮下に入りハンサ飛行場の作業に協力せよ……」と、思いもよらぬ命令が達せられた。情報によればワウ飛行場の攻略に失敗した部隊は、四分五裂の状態でラエ、サラモア地区に転進中とか。前線の状況はさておき、我々は飛行場作業のため毎日二百人が出て行くことになった。

飛行場は作業開始以来数カ月に及び、毎日千人近い兵力と二百〜三百の現地人の協力で六分通りの工事が進んでいたが、我々が作業に当たって驚いたことは、何とも作業そのものが原始的なことだった。椰子林とジャングルを切り開いて滑走路一五〇〇メートルの飛行場を作ることだが、木を倒すのに手斧とノコギリ、土を運ぶのに二人モッコ、水平測量はトンボ（T

の字に組み合わせた器具を数々並べて水平を見る）以外に何も無い。トロッコもなければローラーもなし、全くの人力一本槍（当時の米軍はブルドーザーで木を倒し、数センチもの鉄板を敷き一〜二カ月にて飛行場を造ったと後日知る）。

完成までに六〜十カ月を要すること。円匙に手斧、手製のモッコでエッチラエッチラの土運び。倒した椰子の実に渴きを癒しつつも、炎天下の労働はマラリア患者を続出させる（マラリアは最初より二度目、三度目と回を重ねるごとに熱は高く、日数も長くなる）。二日熱が三日熱、四日熱と、さらに続けば熱帯熱と称し不定期、連続的に高熱を出し、遂には脳神経を侵され狂い死にする。

加えて五日に一度、一週間に一度は敵機の来襲があり、將兵は死傷し、滑走路は爆弾により大きな穴を開けられ、この修復に数日を費やす。兵站部も再三の爆撃で糧秣は吹っ飛ばされ、給養品も日を追って少なくなってくる。従って患者が軍医より渡されるキニーネも不足がち。その後補給船も入らず前線よりの情報も

日増しに凄惨さを加えた。

本隊の第一〇二連隊の消息全く不明で合流のメドも立たない。本隊に合流するまでは我が補充兵を一兵でも多く、精兵として維持する責任をいかにすべきか、我々少数将校にとつての重大課題だ。兵の健康管理維持に必要な給養の改善、衛生設備、宿舍の改善、病兵の処置、作業の計画等々出来得る限りの方法に心を砕くが、いかんせん日を追うごとに病死者は増えるばかりである。

マラリアに倒れるも薬物不足。頼りの同期生たる見習士官（補充隊には十余人の見習士官のほか、将校は輸送指揮官の塩野大尉ほか三人程度）も数人はマラリアで床に伏し、彼が治ればわれを含めてまた三、四人（マラリア療法はキニーネの服用かアクリナミン、バクノンの注射一点張り）。遂に大熊見習士官が熱のため発狂状態に陥る。一日二日と狂いに狂って宿舍内を暴れまわる。「同期の桜」をここに死なすかと士官一同必死の看病をした。ようやくにして皆の心が天に通じたか、六日目には熱も下がり、一同愁眉を聞くこと

が出来た。

椰子の葉陰に南十字星が懸かる南海の孤島に、朝に二人、夕べに一人、流れる星の消えるがごとく部隊から名前が消える。病院から引き取った兵の屍は、せめて父母への形見にと軍刀を振り下ろし、手首を切り落として一握りの遺骨として宿舍に安置（このころの遺骨は何とか故国に帰すことが出来た）した。

一―二カ月を過ぎた頃、部隊の二分の一はマダンに向かつて進攻し、同地において本隊に合すべしとの命令を受けた。六人の見習士官と比較的元気な健兵約三百人が編成され、坂本中尉の指揮のもと、大発を連ねて月光に輝く海上を東進して行つた。同期の友、荒井、飯塚、照沼、鶴田など（氏名はウロ覚え）先行隊の征途無事なるを念じ、船影遠く消え去るまで見送つた。

日ならずして我々残留部隊は北浜進出の命を受け、北浜海岸に移動することになり、新たに海岸警備の任についたのである。ハンサに比べ蚊の少ない北浜海岸

は部隊全員の喜びだった。陣地構築作業もたちまち完成した。昼夜の警戒以外は何もなく、まずは平穏な毎日であった。健康も日増しに回復した。この頃より各部隊は野菜を作り甘藷畑を耕し、とうもろこしを播いて自給自足の道をこうずるようになった。制空、制海権とも米軍の手に帰し、高射砲陣地も撃てば撃たれ、連日の爆撃に次々と破壊されるばかりで、残るは数門とか。そんなある日、これが最後と支給された各人八升の白米は、有り難かった反面心細さも覚えた。

北浜警備中、隣接部隊の伝令が来た。「貴官の兵が我々の糧秣を盗みに来たので捕らえてあるから引き取りに来い」との旨だ。早速その部隊に行き、先任将校に引き取り方を要望したが、おいそれと渡してくれる様子が無い。とにかくその兵に会わせてもらうことにした。宿舎の庭の木に縛り付けられている兵は小隊の中島上等兵であった。私は物も言わず、その兵の縄を切り、立ち上がるより早く三つ五つ……十五、六発続けざま殴った。

私の権幕が凄かったのであろう、期待通り先任将校が止めに入ってきた。心の中で「しめた」と思いながらなお殴ろうとしたら「もうよろしい。その兵は貴官にお渡しする」と引き渡しにに応じてくれた（今勸進帳だが、当時他部隊の糧秣を盗むことなどどこでも行われていた）。これですまずまずと思いがらお礼を述べ、兵と共に帰隊の途についた。途中砂浜の砂丘に腰を下ろし「ああいう手段を取ったのも、お前を早く引き取りたかったからで、痛かったろうが、あの将校に君が可哀想だと思わせるための手段だ。現在の状況では、盗んでも食べ物が欲しいのは当たり前のことだが、それを忍ぶのも軍人であり人間の道だ。これからの戦況はまだまだ悪くならうが皇軍の誇りに生きよう」と行く手を思い、来し方を偲び、お互いの故郷の話などを語りながら帰隊したが、それ以後中島上等兵は、私の当番兵としてよく尽くしてくれた。そして間もなく我々にも本隊合流の命が下ってマダンに進出することになった。私は皆川伍長、中島上等兵他三人の兵と共に、部隊に先行してマダンに向かって急行した。

道は海岸沿いに開いた一本道で、目をつぶって歩いても迷う心配はないが、山あり谷あり大湿原ありだ。

この一本道も友軍が開いた道だ。南緯四度、世界の暗黒島と呼ばれるニューギニアに道路らしい道路のあるはずがない。あるのは獣道か現地人の歩む道だけだった。ニューギニアの面積は日本の二倍半とか、しかし人口は僅か数百万。

私達が上陸第一歩で気付いたことは、半裸の現地人の姿は予想していたものの、街らしい街が全く無いことが一つ。集落といっても十二、三戸の現地人の家が十キロメートル前後離れて点々と建っている。鉄道はもちろん、自動車、自転車の交通手段なし。文字もなければ貨幣もない。文明らしい文明は何一つなく、現地人は半裸で週に一度食糧の確保（主に魚、鳥等）に出、貨幣がないので物々交換をする。食物はバナナにパイア、サゴ椰子の澱粉、タロ芋類。弓矢で射落とす小鳥、あるいは竹槍で突いた小魚類。バナナ、パイア、マンゴー等栽培はしているが現地人に必要なだけだ。食物は山野に十分あり、着物は必要とせず、女

性は椰子の葉で作ったラブラブという腰みの一つ。職業もないが、彼らには家を建てカヌーを作る特技がある。家族の食糧を確保するため、一週間に一日労働することは男の職業と言えなくもない。

彼らは海岸に住みながら、海水から塩を取ることを知らない。しかし塩の貴重さは知っていて、我々が当初携帯していた茶碗一杯ほどの塩で、持ち切れないほどのバナナと交換してくれた。また紙を与えてパイアと交換し（彼らは葉煙草を巻くのに紙を欲しがる）、ナイフでも与えようなら子豚一頭と交換してくれた。

昼なお暗いジャングルの道に踏み迷い、膝を没する湿地帯を踏破し、急坂の山道での一夜は一睡も出来ず、山に入ってはヒル、アブに襲われ、ときに敵機の盲爆を受けながら我々一行はマダンに向かった。幾日か登り続けた山また山の頂上に立った時の感激は、今なお新たな想い出を呼び起こしてくれる。画然と視界は開け、遠く大海原の眺めを眼下に見出したときの喜び、海に連なる祖国を偲んでお互いの話が弾んだ。現地人集落に出て、思わぬバナナの大御馳走。パイ

アの味も格別であった。かくて二十日余りの行程を終わり、ボギヤに到着した（マダン集結はボギヤに変更された）。

早速、第一〇二連隊長（堀慶次郎大佐）に申告した。補充部隊のこれまでの経過を報告し、その指揮下に入り、第三中隊長吉成中尉の第三小隊長を命ぜられた。私の所属した第一〇二連隊（水戸第二連隊の分身）は中国に転戦し、広東からラバウルを経由してニューギニアに渡った。以来ワウ飛行場攻撃、ラエ、サラモアの戦闘を経て、ナポレオンのアルプス越えに匹敵すべき峻険、標高四千メートルのサラワケットを踏破し、さらにフィニシュテル山系を越えるという苦難に耐えて、やっとボギヤに到着したとのことだ。

その時我々が見た連隊の将兵は、まさに餓鬼に等しく、青黄色くなった顔色、頬はこけ、目ばかり光らず、兵。歩行するにも杖がなくては歩むことも出来ず、シャツのやぶれ布で負傷箇所を縛っているその有様は、これが皇軍の精銳とうたわれた水戸第二連隊の杜

兵かと疑わせるに十分だった。マラリアと極度の疲労は人間をかくも瘦せさせるのかと思わせ、今見る友の姿は明日の我が身か、と暗澹たる思いを抱いたものである。

戦闘指導のため、軍より派遣中の某参謀がサラワケット転進の間、師団司令部に追及してきたが、その夜同参謀の当番が大声で泣いている。事情を聞くと食糧を全然携帯していないことが判明した。師団後方担当鈴木参謀が後輩でもある同参謀に向かい「何で食糧を持参してこなかったのか」と言ったところ、同参謀は「司令部に行けばあると思っていた」と言うので「図上戦術でもあるまいし、司令部だって皆それぞれ自分で持つのが精いっぱいの状態だ。この補給状況下余裕などあるはずがない」といささかその認識不足に驚いたが、放ってもおけず、当番兵に飯ごうを持って、皆に少しずつ分けてもらおうよう回らせ、同時に参謀部の将兵に一握りずつ分けるよう命ずる状態であった。

この戦況下でも、作戦担当参謀や上級司令部に行く

ほど、第一線の補給実態に関する認識は浅かったのである。また当の鈴木参謀が転進の間に体験したこともあるが、食物の前には全く階級は無いということをも痛感させられた。

ようやくのことサラワケット山頂を越え、急斜面を下って小川に出たところで一人の兵に出会った。見れば小指大の甘藷を飯盒いっぱい洗っているの、「うまそうだな」と声を掛けた。参謀肩章を見れば平常なら「どうぞ」とか、少なくとも一つや二つ差し上げますと言うところ、事実参謀も内心期待したが、この甘い考えは見事に裏切られた。たとえ上官であろうと何であろうと「命の綱」の小さなイモは、絶対放すものかという姿勢、何処で採ったかとも聞いてもおっくうそうに顔を上げ、黙って先方の小高い山を指差すだけであつた。さらにまた深刻な補給難下、食糧だけは他力本願は禁物、自身必ず携帯の、身にしみる教訓を与えられた。参謀長以下各幕僚共、食糧及び身の回り品は自ら背囊に入れて背負って転進した。

当初、現地人に担送させたところ、夜が明けてみる

と荷物を全部放り出して逃げてしまつていた。今度は兵に分担携行させたところ、消耗した兵はいつの間にか落伍して、結局その分減量となつてしまつた。また夜寝る時は、背囊に食糧をくりつけて枕にしていたが、睡眠中に米袋を切られ、中身を抜き取られた兵もいた。それからは皆背囊の中に入れるようになった。

我が部隊の兵隊は二、三尺の棒切れを持って、日当たりの良い場所に腰を下ろし、身辺にチョロチョロと這い寄るカナヘビをその棒で叩き、取って飯盒に入れる。五匹も取れば十分で、焼いたものを夕食にした。蛋白質の食べられない我々にとってそれは唯一の蛋白源となる。こんなものでもどれほど体力の維持に貢献してくれたか。鼠や、もちろんウジの類まで重要な蛋白として胃に収められた。

十日ほどして、本隊約三百人が到着し連隊に編入された。そして中隊の編成増員があつた。しかし中隊長から渡された小隊名簿を見て驚いた。何と私の小隊長

員は武井軍曹以下十六人なのだ。戦時編成の一個分隊程度の人員が小隊全員なのである。転進に次ぐ転進で兵力は減じ、三百の補充を加えてやっと整った連隊の戦力である。かかる状況下にあつてもなお戦闘は継続される。

我々の集結を知つた敵機は連日連夜爆撃を加えてくる。これに応射する数門の高射砲、機関砲は、たちまち敵の好餌となつて叩かれ、破壊され、友軍飛行機の姿も見えない。切齒扼腕、敵の蹂躪に甘んずるのみだ。彼らの戦闘は全く一方的でその悲惨さは増すばかりだ。機動力を持たない友軍の連絡命令は、全て徒歩伝達しかない。軍命令が第一線に届くのには早くても十日、最前線まで一カ月も必要とする状況に加えて、兵器弾薬の欠乏は、小隊の中で銃を持つ者半数に満たずの状態で、大いに士気に影響してきた。

敵機の来襲は日増しにその数を増し、ノースアメリカンの低空爆撃、カーチス戦闘機の機銃掃射、ロッキード重爆より投下される一トン爆弾の猛威。敵艦隊は海岸近くで遊泳するがごとく、悠々として艦砲射撃

を浴びせてくる。友軍陣地を発見したら最後、四、五機編成の爆撃機が昼夜を問わず連日の猛攻を加え、付近一帯のジャングルを吹き飛ばし、たちまちはげ山になつてしまうほど完膚なきまで叩きつける。ために炊煙は絶対禁物。炊事は全部夜間のみ。しかも防空壕の中で行ふ。負傷兵に対する薬物も無く、軍服、シャツを包帯代わりにし、海水で消毒するのみ。熱気のため傷は腐りウジがわく。木の枝先あるいは指で一匹二匹と弾き飛ばしては海水で洗う。マラリアで四十度の熱を出しても、冷やす水などあるはずもなく、熱の出るにまかせて四、五日、じつと我慢して寝ているだけだった。

アイタベ、ホランディアに敵の大軍が上陸したため、新たな軍命令が下達された。第五十一師団はウエワク付近において陣地を構築し前線との連絡に任ずべし、と。第二十師団が当地の警備に残り、我々は急速に任地に向かつて転進を開始した。五人、十人の行動とは異なり、大部隊の移動は困難を極める。行動速度は遅々として進まず、体力は日増しに消耗し、一日二十

キロ程度がやつと。軍靴は破れ満足なものは一人もおらず、大半は裸足で銃を担いで山道沿いにウエワクへ、ウエワクへ……。道なき道をよじ登り、断崖の横断に一本の綱を頼りに肝を冷やす。

一山越えては一日を寝、一谷越えては夜を明かし、休憩の合間をみては食糧探し。木の実を見つけ草の葉を食べ、現地人の畑に入って先発部隊の荒らした芋畑に親指人の芋を見つけて夕食に。一本のバナナがどんなに有り難かったか。

海岸近くに出ると、敵機に身をさらして標的となり、急流の渡河に押し流された将兵も幾人いたことか。湿地帯の行軍中力尽きた兵は、哀れにも沼中に崩れ去り、起き上がる力も無くもがき苦しむのみであった。

落伍者が出れば、落伍者一人につき護衛の兵十人を要する。四人の二交替で担架を担い、残り二人で装備を搬送しなければならない。現在の一個小隊は十五、六人の編成になっている。一人の落伍者のために小隊全員が落伍者になってしまう。部隊全員が半病人であ

り、歩行の出来ない兵一人に十人もの護送では、部隊の行進に重大な支障となる。やむなく落伍者の集団となつての行進となり、落伍者よりまた落伍者が、先発部隊と後続の落伍者が入り交じって全軍数万の行進となった。

彼らは道端に天幕を張って露営し、体力の回復を待っているのだ。負傷兵や熱発のマラリア患者等々、戦友同士三人五人と一枚の天幕に入っていて、通行部隊より糧秣を乞い、雨露をしのいで部隊追及の努力をしている。

当時の私達にとって一粒のキニーネ、一本のマッチ、一枚の天幕がいかに必要であつたか。万一、一本のマッチがなかったら炊事も暖をとることも（南国とはいえ夜は冷える）出来ないし、一枚の天幕がなければ夜露をしのげない。さらに食塩の尊さを知つたのもこのころだった。味噌、醤油の調味料は既になく、私の背囊には一本の鰹節と、敵重に包んだ数個のマッチ、一握りの食塩、二、三升の米が入っていた。非常の時は食塩を指の先でなめるだけだ。マラリア熱には

一握りの白米に、木の実や草の葉を入れての雑炊が最高の良薬になった。大事に大事にして、この米と塩は少量ながら終戦まで持ち続けた。が、あると知りつつ食べられない苦しみ、辛さ。しかしあると思うからこそ、一時の飢えに耐えられたのかも知れない。

日を経るに従って病死者が増加し、路傍に戦友の遺体がここかしこに目立ってきた。百メートル置きに一人、二百メートル過ぎてまた一人と枕を並べての遺体だ。師団で編成した処理班が埋葬等の処置はしているが、遺体が多く、三日も四日も処置に手が回らないのであろう。文字通り草むす戦友の屍を越えての行軍は悲哀の上もない。部隊から見放された傷病兵は自らの運命を覚悟して、自ら命を絶つ者が続出する。故郷を偲び、今生の想い出と傷病兵相寄って、「海行かば水漬く屍 山行かば草むす屍 大君の……」と悲壮なる合唱の音がジャングルにこだまして、進軍部隊の足を止める。

「ああ堂々の輸送船 さらば祖国よ栄えあれ……」

と軍歌の切れ目が彼らの自決の瞬間だ。戦友を偲び、軍の將兵泣かざる者なし。戦友を見殺し、戦友を見捨てて、何の聖戦やある。兵の犠牲を踏み石にした作戦に、いかなる意義があるのか。これも作戦か。

我ら全軍は、祖国の捨て石として、可能なる抗戦を続けなければならないニューギニア部隊の宿命と受けとめ、涙を振るって屍を越え、部下を捨ててウエワクヘウエワクへと行軍が続く。まさに生きながらの地獄行。これが戦争なのだ。